

ポゼッションとハイプレスの戦術から見た Jリーグと欧州のサッカーの違い
The Differences between J-League and European Football
in terms of Tactics of Possession and High Pressing

トップスポーツマネジメントコース

5023A318-8 土屋健太郎

研究指導教員 平田竹男 教授

1 背景

欧州サッカーにおける日本人選手の存在感は近年、増しており、五大リーグでプレーする日本人は 2023/24 年シーズンの 12 月時点で 15 人に上る。ただ、欧州チャンピオンズリーグ(CL)で優勝を狙うようなビッグクラブに所属する選手はイングランド・プレミアリーグ、アーセナルの富安健洋選手やリバプールに加入した遠藤航選手に限られている。長澤(2019)は、ブンデスリーガ(ドイツ1部リーグ)への定着には、単にサッカーの技術だけでなく監督の要求に柔軟に対応することが必要であると指摘したが、ビッグクラブでの定着にはさらに高度な戦術的理解が必要であると考えられる。

現代サッカーの戦術は 2008 年ごろから 2015 年ごろのバルセロナ(スペイン)の最盛期に象徴されるポゼッションサッカーと、それに対抗するように脚光を浴び始めたドイツのラングニック派と呼ばれるハイプレスサッカーという二つの主要な潮流がある。ポゼッションはボールを保持しながら試合の流れをコントロールし、精密なパス交換をしながら得点を狙う。ハイプレスは積極的なプレスで相手のビルドアップを早い段階で阻み、ボール奪取から素早く攻撃に転じることに重点を置く。欧州のビッグクラブは勝利を目指し、これらを組み合わせながら最適解を追求していると考えられる。この二つの考え方を独立したものと捉えてしまうと、ボール保持自体が目的化したり、相手の攻撃をつぶしたりするだけの魅力のないサッカーに陥る。

遠藤航選手はシュツットガルトではチームの中心だったが、欧州CL優勝6度の名門リバプールに2023年夏に移籍した直後はチームへの順応に苦労した。シュツットガルトでは2020/21年、2021/22年と2季続けてブンデスリーガのデュエル王(1対1の競り合いの勝利数で最多)となって存在感を示したが、同クラブは中堅クラブであり、リバプールのようなビッグクラブとは攻守の考え方に大きな差があったことがその理由と推察される。

先行研究では、プレミアリーグへのステップアップに関して栗山(2013)が各国リーグのプレミアリーグへの輩出数から移籍ルート进行调查した。また、Fernández Navarro, FJ(2015)がプレミアリーグとスペインリーグを対象に攻撃的スタイルと守備的スタイルの分析を行った研究や、Gabriel Anzer et.al(2021)がブンデスリーガの得点パターンに関する分析を行った研究は見られるものの、Jリーグ、欧州の中堅クラブ、ビッグクラブという観点から、それぞれの戦術的な違いに焦点を当てた研究は見られなかった。

2 目的

本研究はポゼッションとハイプレスという現代サッカーの二大戦術の潮流の中で、Jリーグと欧州の中堅クラブ、さらに欧州のビッグクラブとの間にある戦術の違いを明らかにすることを目的とする。

3 方法

本研究では、まずインタビューを通じてJリーグと欧州との戦術的な違いを定性的にまとめ、次に定量化可能な指標をインタビュー調査から抽出して欧州のビッグクラブとそれ以外のクラブとの間にある戦術的な違いを調査した。欧州のリーグは、各クラブの成績などを基にした欧州サッカー連盟(UEFA)のランキングで最上位のプレミアリーグと日本人の在籍人数が最も多いブンデスリーガを対象とした。

3.1 インタビュー調査

ブンデスリーガでプレー経験のある酒井高德選手と長澤和輝選手、J1のサンフレッチェ広島ドイツ人監督であるミヒ

ャエル・スキッベ氏、ドイツ代表のサッカー分析に携わった吉田健太氏と大野嵩仁氏、ドイツの指導者資格を持つ川田尚弘氏を対象とした。Jリーグと欧州の戦術的な違いに関する質問を行い、得られた回答は逐語録にまとめ、コードを生成し、サブカテゴリーとカテゴリーの抽出を行い、Jリーグと欧州の戦術的特徴をまとめた。

3.2 映像分析

(1) Jリーグと欧州におけるボール奪取の違い

3.1の結果を踏まえ、「ボール奪取」への言及が顕著であったことから、2023年11月のマンチェスター・シティ対リバプール(プレミア)、ドルトムント対バイエルン・ミュンヘン(ブンデス)、ヴィッセル神戸対名古屋グランパス(Jリーグ)のそれぞれの試合を通じての「積極的ボール奪取」の回数及びエリアを調べた。また、プレミア、ブンデス、Jリーグの強豪3クラブの2023/24年シーズン(Jリーグは2023年)の開幕から16試合の得点場面の映像内で確認できた「積極的ボール奪取」の回数およびエリアを調べた。

「積極的ボール奪取」は、「①空中戦で競り勝って味方につなぐ」「②複数人で相手を囲んで奪う」「③連動した守備でミスを誘う」「④1対1の競り合いで奪う」「⑤パスカット、インターセプト、クリアで味方につなぐ」の5つと定義し、それぞれを目視で記録した。分析の精度を高めるため、同じ試合の映像を複数の分析者が独立して分析し、その結果を比較して一貫性を確認し、相違がある場合は再評価を行った。

3.3 欧州のビッグクラブと中位、下位の戦術的な違い

サッカーのデータサイトfbref.comには欧州の各リーグに統一されたスタッツが存在するため、ボール奪取に関連するスタッツとしてタックル数、ポゼッションに関してはタッチ数を使用し、それぞれのエリア(アタッキングサード、ミドルサード、ディフェンシブサード)の割合を分析した。これらの結果をプレミアリーグ、ブンデスリーガの上位、中位、下位のクラブごとに比較し、ビッグクラブとそれ以外のクラブ間での戦術的な違いを検証した。

4 結果

4.1 Jリーグと欧州の戦術的差異のインタビュー

欧州とJリーグの戦術的差異として大きく「ボール奪取」と「プログレッシブプレー(ゴールへ向かうプレー)」の二つが抽出された。「ボール奪取」では、「リトリート(自陣に戻って守備陣形を整える)するよりも前線からのプレス」「ボール奪取を目的とした素早い攻から守の切り替え」「ボール奪取への評価基準」の三つのサブカテゴリーが抽出された。

表1 ボール奪取を目的とした攻から守への素早い切り替え

長澤和輝	このタイミングでボール離さないで、後ろからつかれるなというタイミングがあって。(Jリーグ復帰後も)焦って、早めに仲間を探してパスをつながなきやみたいのがあったんですけど、意外と(奪いに)こない。ギャップがあった。
スキッベ	ボールを奪われたら、その瞬間が奪う確率が高い。そのやり方は正解だと思うし、似たやり方はクロップも正解。ボールを失って、相手が100%(完全に)支配している状況になる前に奪い返す。ボールを奪っただけで止まっちゃいけない。もう1回ボール奪われる状況が自分たちに降りかかってくる。
大野嵩仁	ゲーゲンともいうんですけど、ヤーゲンともいうんですよ。(ドイツ語で)狩るという意味で。言葉的なニュアンスも影響しているのかなと思いますね。ほんとに、失った瞬間に狩りに行く感じ。
川田尚弘	スタジアム(練習場)にカウントダウンが始まるシステム入れて、失って8秒以内にボール取るとか。

特に長澤選手から、ブンデスリーガからJリーグに戻った際に「敵が来ていないのにすぐ早くボールを離していたときがあった。焦って早めにパスをつながなきやというのがあったが、意外と(奪いに)こない。ギャップがあった」という発言があった(表1)。また、「プログレッシブプレー」では「ボール奪取後の守から攻の切り替え」「リスクを負っても前進」「ボールの奪回を想定した戦術的ポジショニング」「パ

スの方向と優先度」というサブカテゴリーが抽出された。特に酒井高德選手から「取ったボールを『取りました。回そうぜ』というのがJリーグ」という発言が確認された(表 2)。

表 2 ボール奪取後の守から攻への切り替え

酒井高德	取ったボールを、「取りました、回そうぜ」というのがJリーグ。縦に速いのが悪いみたいな風潮がちょっと日本にあるけど、そうじゃない。
長澤和輝	要は5秒以内に取ってゴールに向かうみたいなサッカー。カウンターなんかにしてもドイツのカウンターはめちゃくちゃ速い。そのスピードでゴールにいかれたら、間に合わない。Jリーグだとテンポ横パスが入ったりする。速攻だけど、そこまで速攻じゃないように、たぶん、大迫選手なんかは感じるのかもしれない。とりあえず四の五の言わず縦に行くと全員に言っていたと思うんですけど、それは、そのスピードと感覚を出したかったんだと思う。
スキッベ	速くプレーすること。それこそ、ランゲニクがいているようなところ、奪ったらすぐその状況を打開するプレーにつなげないといけない。それをつなげるとゴールに結びつく。
吉田健太	Jリーグの試合はゲームのスピード感がすごいゆっくりだなと感じて、これは、安全なところでボールを回す回数、確率が高いなというのがある。最近ドイツもポジションを意識する、スペインの流れがあって、そっちよりになりつつも縦へのサッカーになっている。
大野嵩仁	Jリーグとドイツの試合を見ると、Jリーグはゆっくり見える。ボールが入れ替わった瞬間に、(ドイツは)縦にと言うよりはゴールにいくスピードとかはやっぱり、すごいあると思う。

4.2 試合内容の分析

1) 積極的ボール奪取数

表 3 積極的ボール奪取の割合

リーグ	対戦カード	積極的ボール奪取		プレミアリーグ、ブンデスリーガの上位同士の試合は、攻守の切り
		攻守の切り替わり	%	
英	マンチェスターC	68/123	55.28	グ、ブンデスリーガの上位同士の試合は、攻守の切り
	VS リバプール	59/125	47.20	
独	ドルトムント	68/131	51.90	グ、ブンデスリーガの上位同士の試合は、攻守の切り
	VS バイエルン	73/137	53.28	
日	神戸	57/174	32.76	グ、ブンデスリーガの上位同士の試合は、攻守の切り
	VS 名古屋	57/165	34.55	

替えのうち、積極的ボール奪取の割合が50%前後だった一方、神戸と名古屋の割合は30%前半であった(表 3)。

2) 得点パターン

積極的ボール奪取からの得点はバイエルン(独)の20点が最多だった。マンチェスター・シティー(英)は17得点、ライプツィヒ(独)は15点、リバプール(英)が14点。ドルトムント(独)は13点、神戸(日)は12点であった。マンチェスター・シティーはショートカウンターとポゼッションからの得点が同じ10点だった。

4.3 欧州上位クラブのプレーエリア特徴

表 4 英独のエリア別タックル割合(2017/18-2022/23)

リーグ	クラブ	Dサード	Mサード	Aサード	プレミアとブンデスの上位3クラブは中位、下位と比較してアタッキングサードでのタックルの
英	上位	42.29	41.36	16.35	とブンデスの上位3クラブは中位、下位と比較してアタッキングサードでのタックルの割合が特に高い結果となった(表 4)。
	中位	50.17	38.47	11.36	
	下位	51.41	38.12	10.47	
独	上位	42.92	42.81	14.27	とブンデスの上位3クラブは中位、下位と比較してアタッキングサードでのタックルの割合が特に高い結果となった(表 4)。
	中位	47.41	41.41	11.19	
	下位	51.41	39.17	9.42	

割合が特に高い結果となった(表 4)。

4.4 英独のエリア別ボール保持割合

プレミアとブンデスの上位3クラブはそれぞれの中位、下位と比較してアタッキングサードでのタッチ数の割合と、1試合あたりのアタッキングサードおよびペナルティーエリア進入回数ともに上回った(表 5)。

5 考察

5.1 欧州のリーグと日本の戦術的な差異

インタビュー調査からは、欧州では守備に対する根本的な考え方として、積極的にボールを奪うプレーが重視されており、ボール奪取が成功した場合にはリスクを冒してでもゴールへ向かうプレーへとつなげることが特徴として挙げられる。その傾向に対してJリーグはボール奪取をしても必ずしもゴールに向かわず、ボールを失わないプレーを優先的に選択することを評価する傾向があると言える。

表 5 英独のエリア別タッチの割合とゴール前進入回数

リーグ	クラブ	タッチ数(%)			1試合平均のゴール前進入回数	
		Dサード	Mサード	Aサード	Aサード	PA
英	上位	24.42	47.65	27.93	20.2	7.2
	中位	32.07	44.28	23.65	12.8	4.4
	下位	33.56	43.29	23.15	11.0	3.4
独	上位	27.82	48.22	23.96	16.3	6.1
	中位	33.34	45.42	21.24	11.5	3.9
	下位	35.46	44.38	20.16	10.1	3.2

5.2 欧州ビッグクラブの戦術的特徴

プレミアリーグとブンデスリーガの上位クラブの特徴として、攻守両面においてアタッキングサードでのプレーが多いことが特徴として挙げられる。遠藤航選手はインタビューにおいて、リバプールでの守備について「あえてリスクを冒して奪いにいくことで、周りも反応してボールを奪えている」と答えたほか、出場機会を確保しはじめた時期からはポジションが以前より5.6m高い位置でプレーするようになったと報じられた。相手陣内におけるボール奪取のトライは失敗すればカウンターを受けるリスクがありながらも、そのリスクを冒してボールを奪い返す姿勢がリバプールでは求められている。攻撃においても欧州の上位クラブは相手ゴールに近いエリアでのタッチ数が多いことから、相手ゴール付近でボール保持していることが読み取れる。実際にマンチェスター・シティーはカウンターだけでなく、Jリーグでは確認できなかったポゼッションからの得点数も多い。

5.3 欧州ビッグクラブにおけるハイプレスサッカー

現代のハイプレスサッカーはランゲニク派と呼ばれるドイツを中心に広がった考え方である。ドルトムントで実績を積んだクロップ監督が現在はリバプールの指揮を執っており、マンチェスター・シティーのグアルディオラ監督も2013/14年から3シーズンはバイエルン・ミュンヘンの監督を務め、ドイツ・サッカーに触れている。ライプツィヒなどのランゲニク直系のクラブだけでなく、欧州上位クラブの戦術にはドイツの影響が反映されていると考えられる。グアルディオラ監督はバイエルン時代の2015年11月に「ボール保持率が大事でないという人もいるが、私にとっては最も重要。100パーセントが理想だ」と語っている。これは究極的な野心であるが、単にボールをつなぎ続けるだけでなく、相手からボールをいかに早く奪うかという視点はポゼッションサッカーにとっても極めて重要である。

5.4 日本の環境

ボール奪取とその後の相手ゴール方向への仕掛けは、Jリーグと欧州の戦術的な違いといえる。そんな中で2023年シーズンは神戸がJリーグ初優勝を遂げた。これは酒井高德選手や大迫勇也選手ら欧州での経験が豊富な選手を中心にハイプレスと縦に速い攻撃という要素を取り入れ、チームとして統一した戦い方ができた効果と考えられる。Jリーグも2026年夏からはシーズン移行に伴い猛暑下での試合が減ることからハイプレスを取り入れやすくなる。欧州のようなスタイルのクラブが増えることは、選手が欧州に移籍することを考えたとき、順応に好影響をもたらすと期待される。

また、欧州の中堅クラブからビッグクラブへと移籍した例を考えると、南野拓実選手はリバプールへ移籍する前にランゲニク氏がスポーツディレクターを務めていたザルツブルク(オーストリア)に所属した。素早いボール奪取とそこから速攻という戦い方を採用するクラブで、クロップ監督率いるリバプールの表れでも通じるものがあり、移籍は高い適応力があるとの期待の表れであったとも考えられる。

5.5 研究の限界

本研究の分析対象はリーグ戦のデータを対象としており、ノックアウト方式の試合での戦術の分析には至っていないため、更なる調査が必要である。

6 結論

Jリーグでは、ボール奪取後に時間をかけて相手の守備を組織的に崩すポゼッションスタイルが好まれる傾向がある一方で、プレミアやブンデスではハイプレスを駆使し、ボール奪取直後に速攻を仕掛けるスタイルが一般的であることがインタビュー調査などから示された。さらに、プレミアやブンデスの上位クラブは、よりリスクが高い相手ゴールに近い位置でプレスを行うことに加え、ボール奪取後にカウンター以外にもポゼッションからの得点も奪っており、この点はJリーグとの顕著な違いであった。日本人選手が欧州に適応し、さらにビッグクラブへのステップを考える上でこれらの戦術的な違いを認識することは重要である。